推理小説代表作選集

The mystery annual of Japan 1992

1992年版 日本推理作家協会編

The mystery annual of Japan 1992

江苏工业学院图书馆
藏书章

1992=推理小説年鑑 推理小説代表作選集

日本推理作家協会編　講談社

1992年版　推理小説年鑑
推理小説代表作選集
定価1850円(本体1796円)

1992年5月25日　　第1刷発行

編　者　　日本推理作家協会
発行者　　野　間　佐　和　子
発行所　　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号　112-01
電話　編集部　03(5395)3505
販売部　03(5395)3622
製作部　03(5395)3615
印刷所　　豊国印刷株式会社
製本所　　株式会社黒岩大光堂

© 日本推理作家協会 1992 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。なお，この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-114534-7　　(文2)

1992年版　推理小説年鑑

推理小説代表作選集〈目次〉

序 …… 生島治郎 5
ひと言の罰 …… 夏樹静子 9
専務、おはようございます …… 吉村達也 37
細長い窓 …… 阿刀田高 57
結婚式の客 …… 小池真理子 89
最後の花束 …… 乃南アサ 113
六月は名ばかりの月 …… 宮部みゆき 145
緋の川 …… 小杉健治 179
いい人なのに …… 佐野 洋 209
アメリカ・アイス …… 馬場信浩 229

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

ゼロの男……日下圭介 253
見知らぬ自殺者……清水義範 273
早池峰山の異人……長尾誠夫 297
鏡の中で……東野圭吾 323
奇縁……高橋克彦 347
アルコホリック・ホテル……高村　薫 369
推理小説・一九九一……二上洋一 404
SF1991年……風見　潤 409
受賞リスト…… 414

装幀　細谷　巖
写真　沼田　望

序

日本推理作家協会理事長
生島治郎

本書は一九九二年版の日本推理作家協会編纂による『推理小説代表作選集』であります。つまりは、昨年中に発表された推理小説の短篇の中から選りすぐった十五の作品を収録したということになります。

ご存知のとおり、ミステリのブームはつづいており、短篇だけでも、年間に発表される数は膨大なものになるわけですが、その中から、原田裕、郷原宏、山前譲、林邦夫、多田兼成、新保博久、中村利夫の七氏が自分の眼利きにかなった作品を選んで下さったのがこの短篇集なのです。

ここに、選考委員の方々のご苦労を深く感謝いたします。

どんな短篇でもそうでしょうが、小説は時代を反映するものであります。特に、ミステリの場合は、その時代に合った意外性を作品の中にひそませなくてはなりません。

また、その時代を代表する書き手も次々と新らしくあらわれており、それにつれて、テーマ、スタイル、テクニックともに変貌しております。

一冊の中で、ベテラン、新人ともに技を競い合うのを見られるのが短篇集の醍醐味ともいえるでしょう。

またそれだけ、現在の日本のミステリは層が厚くなり、裾野も広がっているわけです。
では、今年の鏡ともいうべき、この短篇集をじっくりとお楽しみ下さい。

平成四年四月

1992年版推理小説年鑑

推理小説代表作選集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

ひと言の罰

夏樹静子

1

「――こんなことなら、無理してマンション買わなきゃよかったんだけど。人間いつどんな災難に遇うかもわからないのに、ギリギリの限度までローンを組んだりして」
臍をかむ思いの傍ら、切り出そうかやめようかと、糸子はまだ迷い続けている。高校の同級生の由加利とは、卒業後も二十年以上親友付合いをしてきたが、今まで一回も金の問題で迷惑をかけたことはなかったのだ。夫に急死され、中学生の息子と二人、途方に暮れていた時だって――。
「平山さんが亡くなられて、もうどれくらいになるかしら」
糸子の内心が伝わったように、由加利が訊く。
「好夫が中学一年の秋だから、今年でまる七年ね。主人は私と同い齢で、まだ三十二だったでしょ。生命保険もぜんぜん入ってなかったしねえ……」

厨房機器メーカーのサラリーマンだった平山は、定期検診で胃癌が発見され、半年後にあっけなく世を去った。
残された糸子は、さまざまな職業を転々としながらも、なんとか息子を高校まで出したいと願って働いた。その好夫が昨年の春無事に高校を卒業して、都内のホテルに就職した。その一年くらい前から、糸子も知人の紹介で勤め始めた小さなエステティック・サロンは、給料は安いが、スキン・ケアの仕事がすっかり性に合って、腰をすえて続けたいと考えるようになっていた。
昨年まで、糸子たちは町田市のアパートで暮していたが、好夫の勤務先は新橋、糸子は目黒なので、通勤には片道二時間近くかかった。
思いきって駒沢に中古マンションを買って移ったのが今年四月。多少の貯えも全部頭金に注ぎこんで銀行ローンを組んだ。
貯金はカラになっても、親子二人で働けばなんとか返していけるだろうと張り切っていた矢先、降って湧いたような災難に出くわしてしまった。
休みの日、友だちに借りたオートバイを乗り回していた好夫が、大型の外車と接触事故を起こした。落度は一時停止を怠った好夫の側にあったが、幸い大した被害はなかったようで、相手の車のフロントドアにかすかな擦り傷をつ

けただけですんだ。運転していた男も、「これくらいなら自分の保険で直せるし、警察を呼ぶまでのことはないでしょう」と、穏やかにいってくれた。念のためにと好夫の名刺だけ受け取って、その場は別れた。

ところが、幸いと思ったのがこちらの甘さだった。

翌々日、運転していた男を含む三人連れが好夫の勤め先のホテルに現われて、彼を呼び出すなり、車の修理代百万円を請求した。こちらがなんと抗議しても、とにかくかかったものは弁償してもらいたいと、二日前とは打って変った威嚇的な態度を示した。はじめて受け取った名刺には、暴力団事務所の名前が刷ってあった——。

「それで、払ったの?」

話が戻ると、由加利が眉をひそめて尋ねた。

「ええ、結局はね。しばらくは好夫も抵抗してたんだけど、三人組は毎日押しかけてくるし、上司に相談しても、このままではホテルの営業にさしつかえるといわれて。暮れのボーナスで返す約束で上司にお金借りて、私も勤め先で前借り、その上うちにあったわずかな貯えも全部かき集めて……」

「大変だったのねえ」

「これからがまだもっと大変って感じなのよ。だって、好夫の借金はボーナス全部渡しても足りないくらいなのに、ローンの返済額はボーナス月の十二月にはふだんの三倍になるの。私のほうもこれ以上勤め先に無理もいえないしねえ……まあいっそマンションを明け渡してしまえばすむことかもしれないんだけど……」

やっぱりこれ以上はいうまいと、糸子は喉元でことばをのみこんだ。由加利の家庭は子供のいない夫婦二人暮し、おまけに夫の父親は都内に土地を持っているなどで、百万円くらい彼女にとってはさほどの金額ではないだろう。

それでも、二人が今まで何のこだわりもない友だち同士でいられたのは、一度だって金の問題が間に挟まったことがなかったからなのだ。少くとも、自分の口からはいい出したくない。

糸子がちょっと顔色を窺う感じで見あげると、由加利の迷っている視線とぶつかった。

こちらからいい出すべきなのだろうか?

由加利もまた、探るように糸子の顔を眺めている。

こちらがいい出すのを待っているのかしら、百万円くらいならご用立てしてもいいのよ、と……?

まあ、今までの二人の付合いからしても、このさいその程度の援助はやむをえないかもしれない。糸子が三十そこそこで夫に先立たれ、女手一つで子供を育てていた間、自

分はまず大過ない結婚生活を続けていたのだから。
いや、傍目には大過なくても、中身は虚しい日々だった……。

そう思うと、窮状を打ちあけられた今でさえ、ふっと糸子に嫉ましさすら覚えた。

「それにしても、あなたには苦労のし甲斐があるってものよねえ。息子の好夫さんが立派に一人前になったんだし」

「一人前なんていえないわよ、今度みたいなことがあっては」

「私と比べたらずっと張りのある生活じゃないかしら」

由加利はちょっとはぐらかすように、ゆっくりした手つきでお茶を淹れ替える。そろそろ九時になるが、夫は今夜も遅くなりそうな口吻だった……。

「私なんか、子供も仕事もないし、その分主人とピッタリいってるならまだしも、あの人の心はよそに奪られてるし……」

由加利より四つ上で四十三歳になる夫の光井勝久は、コンピュータ・ソフトの販売会社に勤めている。見合い結婚して、二年目に由加利は一度妊娠したが、流産して、以来子宝には恵まれなかった。それでも由加利は、長身で押出しがよく、性格も陽気でさっぱりした夫に満足して、幸せな気持で暮していた。

その夫に女がいるらしいと、気配で察しられたのは、五年ほど前のことだ。

問い詰めると、あっさり白状した。相手は取引先の会社の独身ＯＬだったが、きちんと別れると、その時光井は約束した。

ところが、最近になって再び不審を感じ、調査した結果、約束を守るどころか、もっと重大な事態が発生していたことを、由加利は悟らされた……。

「例の問題は、はっきりしたの？」

今度は糸子が尋ねた。彼女にだけはおよその事情を打ちあけていた。

「ええ。女が妊娠してるのは、やっぱり確かみたい。実家の兄が探偵社で調べさせたの。とっくに勤めをやめて、中野のワンルームマンションで暮してるわ。彼女が近所で喋ってる様子では、妊娠四ヵ月くらいで、当然産む気でいるらしい。私も今度は肚をくくって、探偵社で調べたことは知らん顔してるの。主人もギリギリになって私に切り出すつもりなんじゃないかしら」

「切り出すというと？」

「もちろん離婚をよ」

「まあ……それで、由加利はどうするつもり？」

「頑として応じてやるもんですか。ただし……」

「……？」
「いよいよという時には、莫大な慰謝料と、その後の私の生活費を保証させるわ。それくらい当然でしょう。一方的に向うが離婚の原因を作った有責配偶者なんですもの」
「そうねえ、このマンションくらいそっくり貰ってもいいわね」
「あら、これはどっちみち夫婦の共有財産として均等分けされるわけだけど、こんなものではとても承服できないわよ」
大井町にあるこの3Kのマンションは、約十年前に中古で購入して、糸子と同様ローンを返済中だが、駅まで徒歩二十分かかるし、建物も古いから、今売っても三千万円くらいにしかならないだろう。
「——いえね、今現在うちの財産といえばこのマンションくらいしかないわけだけど、目当てはほかにあるの」
ああ、と糸子が勘付いた表情なので、由加利も軽く口に出した。
「主人の父は今年で七十八になるけど、まだ頑固に自分の家で独り暮ししてるわ。家はもうボロボロでも、土地が百二十坪もある」
「例の田端のおじいちゃまね」
由加利が大掃除に行く時、糸子も付合ってくれたことがある。
「そう、駅から歩いて五分くらいでしょ、それも環状線の内側だから、今では坪四百万円はしてるらしい」
「百二十坪で五億円か……」
「義母はもういないし、主人は姉と二人姉弟だから、義父にもしものことがあった場合、相続税を引いても主人に二億円くらいは入る勘定なの」
「それを待ってるわけね」
「まあね。今離婚を承諾したら、主人の思う壺ですもの」
「おじいちゃまはその後もお元気？」
由加利は苦笑交りの溜め息をついた。
「本人は、口では早く安楽死したいなんていってるけど、いくつまで生きるかわからないわね。私だって来年は四十でしょう。いつまでも意地を張って、愛のない結婚生活を続けるより、いっそ早く離婚して第二の人生を切り拓いたほうが賢いんじゃないかとも思うんだけど、やっぱり先立つものがなくてはねえ……」
「もうしばらくの辛抱じゃないの」
「わかるもんですか。ああ、誰かほんとにあの人を安楽死させてくれないかしら。そしたらいくらでも払うんだけど……」
糸子の吃驚した顔を見ると、由加利も我に返って口をつ

ぐんだ。このところ夫への怒りや嫉妬、離婚やその後の生活などを考えつめてノイローゼ気味だったので、妙なことを口走ってしまったようだ。

由加利は今の発言を紛らす笑いを浮かべ、知らず知らず阿るような調子で話題をもとに戻した。

「お金が要るのはまずあなただったわね」

2

「おじいちゃんが？　――どうやって？」

十月二十一日の昼まえ、夫からの電話で義父の死を告げられた時、由加利は咄嗟にそう問い返した。それが、糸子が「百万円」の相談をしにきた日からまだ三週間あまりしかたっていなかったせいかもしれない。

「布団の中で頸を絞められていたそうだ。今姉さんから電話があってね」

「お姉さまが見つけたの？」

「ああ。さっき様子を見に行ったら、天気がいいのに雨戸が閉まったままになっていた。おかしいと思いながら自分の鍵で家の中へ入ったところが――」

ここ二年ほど寝室にしていた奥の八畳間の布団の中で、冷たくなっている光井良市を発見した。頸にストッキングが巻きついて、後ろで結んであったので、絞殺されたらしいとすぐにわかった。彼女は警察に報らせたあと、光井の会社へ電話してきたという。

「ぼくはこれから田端に行くが、おまえは、今のところそっちで待ってればいいだろう」

また連絡するといって、光井はあわただしく切った。

愛人の存在を知られていることに気付いていない彼は、日常由加利とごくふつうの接し方をしていた。あっけらかんとした性格で、父の死を知った直後でも、さして悲痛な声にも聞こえなかった。

由加利はといえば、受話器を置いた途端頭に浮かんだのは、さっき最初に自分の口をついて出たことばだった。

光井は確か「おじいちゃんが亡くなったんだよ」といったと思う。姉の子供たちがおじいちゃんと呼んでいたので、こちらもそれに合わせていたのだが、呼び方はともかく、「亡くなった」といわれたのに対して、「どうやって？」という反問はいささか不自然ではなかったか？

「どうして？」と訊いたのならまだしも。

いや、夫にはその微妙なちがいまでは気付かれなかっただろう。

由加利はちょっと狼狽している自分を落着かせた。

でも、私には自分の心理がわかっている。思わず「どう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co